

(2) 工法について

当参考地における整備工事にあたっては、以下の3点に留意した計画を立てている。①周囲の景観に配慮した工法である点、②掘削を伴わずにこれ以上の崩壊を防ぐことができる工法である点、③当庁の敷地内において完結する工法である点という3点である。また、当参考地で用いられている葺石の石種と混交しても分別可能な石種を選定中である。具体的な工法は目下検討中で、平成26年度以降に施工予定である。採用した工法については、施工時に実施する立会調査の結果とともに本誌において報告することとしたい。

(徳田・清喜・加藤・横田・土屋)

付編

赤穂市立有年考古館所蔵の伝東百舌鳥陵墓参考地採集埴輪について

ここで報告するのは、兵庫県赤穂市に所在する赤穂市立有年考古館所蔵の伝東百舌鳥陵墓参考地採集埴輪片である。埴輪片は、有年考古館を設立した故松岡秀夫氏が採集したものとして伝わるが、具体的な採集箇所は不明である。報告にあたっては、東百舌鳥陵墓参考地関係の資料調査として、平成25年3月26日に埴輪片の実測、採拓、写真撮影を赤穂市埋蔵文化財調査事務所で行った。資料調査では、赤穂市教育委員会事務局生涯学習課文化財係および同系の山中良平氏にお世話になった。記して感謝申し上げる。

有年考古館所蔵の埴輪片は、全部で6点である。内訳は、円筒埴輪片が4点、他と比べて明らかに小型の円筒埴輪片が1点、蓋形埴輪片が1点である。埴輪の焼成については、全ての資料に黒斑がみられないことから、窖窯によるものと考えられる。

158は、円形透孔と突帯が3条残る円筒埴輪片である。注記には「東百舌鳥御陵参考地 二七二・一〇」とある。色調は黄褐色で、焼成は良好である。粘土紐積み上げの単位は、約3cmである。突帯形状は、頂部の窪んだ台形で、突帯間隔は約11.5cmである。外面にはB d種ヨコハケ⁽²²⁾、内面にはナデを施す。159とハケメは同一である。

159は、円形透孔と突帯が3条残る円筒埴輪片である。注記には「東百舌鳥御陵参考地」とある。色調は外面が暗褐色、内面が黄褐色で、焼成は良好である。粘土紐積み上げの単位は、約3cmである。突帯形状は、頂部の窪んだ台形で、突帯間隔は約11.5cmである。1条の突帯下に、2重の沈線が残る。外面にはB d種ヨコハケ、内面にはナデを施す。158とハケメは同一である。

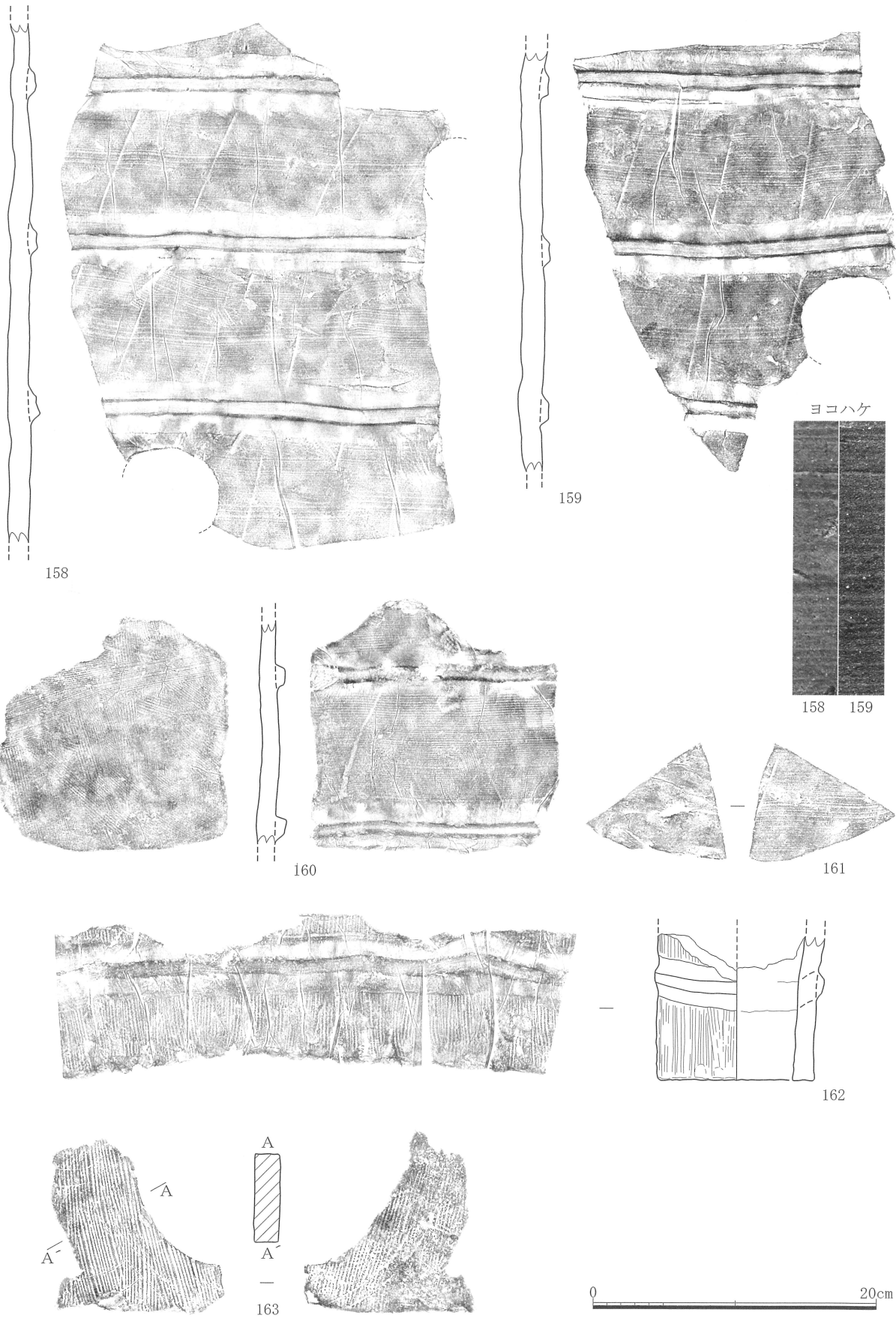
160は、突帯が2条残る円筒埴輪片である。注記には「東百舌鳥御陵参考地 二七二・一〇」とある。色調は灰白色で、焼成はやや不良である。突帯形状は台形で、突帯間隔は約10.5cmである。外面にはB d種ヨコハケ、内面にはナデを施す。

161は、円筒埴輪片である。注記は無い。色調は黄褐色で、焼成は良好である。外面にはB d種ヨコハケ、内面にはナデを施す。

162は、小型円筒埴輪片である。底部径は10.7cm、残存高は10.3cmである。注記は無い。色調は褐色で、焼成は良好である。基部は高さ約5cmの粘土帯で、粘土帯より上の粘土紐積み上げ単位は約2cmである。突帯形状は、低い台形である。外面にはタテハケ、内面にはナデを施す。

163は、蓋形埴輪の立飾り片である。注記には「東百舌鳥御陵参考地」とある。色調は黄褐色で、焼成は良好である。両面にハケメが残り、その上から線刻を施している。

有年考古館の円筒埴輪片は、突帯形状、突帯間隔、B d種ヨコハケといった特徴から、東百舌鳥陵墓参考地出土品と特徴が一致するもので、「東百舌鳥御陵参考地」という注記からも東百舌鳥陵墓参考地周辺で採集されたものと考えられる。ハケメについては、事前調査で出土した埴輪と一致するものはなかったが、158と159は同一のハケメである。161は小片のため、確実ではないが、158と159のハケメと同一の可能性はある。埴輪片が採集された年月日については、158の注記にある「二七二・一〇」と160の注記にある



第72図 東百舌鳥陵墓参考地 伝採集品実測図 埴輪 (1/4)

「二七.二.一〇」より昭和27年2月10日であろう。

162の小型円筒埴輪は、注記が無いため、確実ではないが、他と一括保管されていたその状況から、東百舌鳥陵墓参考地周辺で採集されたものの可能性が高い。162は、同様に小型の円筒埴輪状土製品が大阪府堺市御廟山古墳の造出斜面より出土している⁽²³⁾。ただし、そちらはサイズがやや大きく、突帯も高く、基部の成形では粘土帯を2本使用し、タテハケ後にナデを外面に施すなど相違点が多い。報告⁽²⁴⁾では、円筒埴輪状土製品に施工上の基準点としての役割も想定しており、162も同様に用いられた可能性がある。(横田)

註

- (1) 土井和幸・内本勝彦「聖塚古墳・聖の塚古墳・府大構内遺跡隣接の調査—HJZ-1次・HJNT-1次・FDK-1次調査—」『百舌鳥古墳群の調査』4、堺市教育委員会、2011年。
内本勝彦「舞塚古墳の調査—B TZ-2次調査—」『百舌鳥古墳群の調査』4、堺市教育委員会、2011年。
- (2) 大阪府立泉大津高等学校社会科生徒自治会地歴クラブ『土木工事の破壊に伴う考古学調査報告』第1冊(和泉考古学別冊)、1958年。
- (3) 堺市教育委員会編『こうじ山古墳(跡)調査報告書』(堺市文化財調査報告第1集)、1973年。
- (4) 内本勝彦「正楽寺山古墳の調査—SRJ-2次調査—」『百舌鳥古墳群の調査』4、堺市教育委員会、2011年。
- (5) 鐘方正樹「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内I—杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告—』(『奈良市埋蔵文化財調査研究報告』第1冊)、奈良市教育委員会、1997年。
- (6) 加藤一郎「大山古墳の円筒埴輪—竈窯焼成導入以後における百舌鳥古墳群の円筒埴輪—」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成17～19年度科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書、研究代表者：白石太郎、奈良大学文学部文化財学科、2008年。
- (7) 藤井幸司「円筒埴輪製作技術の復元的研究—竈窯焼成導入以降を中心に—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会、2003年。
- (8) 鐘方正樹編「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991、奈良市教育委員会、1992年。
- (9) 註(6)に同じ。
- (10) 註(6)に同じ。
- (11) 白鳥陵の埴輪はTK23型式段階か。
- (12) 加藤一郎「古墳時代中期の埴輪生産に関する予察」『技術と交流の考古学』同成社、2013年。
- (13) 辻美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室、1999年。
中野 咲「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第33冊、奈良県立橿原考古学研究所、2010年。
- (14) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年。
- (15) 森 隆「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、1995年。
- (16) 金田善敬「有袋鉄斧の製作技術の検討」『古代吉備』17、古代吉備研究会、1995年。
- (17) 古瀬清秀「農工具」河上邦彦ほか編『古墳時代の研究』8古墳Ⅱ副葬品、雄山閣、1991年。
- (18) 辻本裕也「グワシヨウ坊古墳の盛土について—土質分析結果—」『百舌鳥古墳群の調査』2、堺市教育委員会、2009年。
- (19) 徳田誠志・清喜裕二「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵の墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、1991年。
- (20) 森 浩一「3 大山古墳-仁徳陵古墳」『大阪府史』第1巻、大阪府、1978年。
- (21) こうした事例は中期古墳に多いようである。
加藤一郎「円筒埴輪の設置方法」『埴輪研究会誌』第15号、埴輪研究会、2011年。
- (22) 一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』V、大阪府教育委員会、1988年。
- (23) 十河良和「堺市出土遺物 (1) 埴輪」『百舌鳥古墳群の調査』5、堺市教育委員会、2011年。
- (24) 内本勝彦「第4トレンチ 堺市調査区」『百舌鳥古墳群の調査』5、堺市教育委員会、2011年。